

## 映画の小箱

政情不安のプロヴァンスで、  
お互いを尊重しながらも  
惹かれ合う、  
ふたりの危険な旅。

# 『プロヴァンスの恋』 美しい風景と プラトニックな愛

金丸弘美=文  
text by Hiromi Kanamaru



ここには生の喜びと、希望と、誇りと、ロマンチズムと、なにより自由を謳歌しようというふたりの主人公のひたむきさと、途すが、画面に溢れている。それは、プロヴァンスの美しい風景とあいまって、強い印象を与えずにはおかない。

舞台は一八三二年の夏。イタリアのすぐ隣に位置する風光明媚なプロヴァンスである。この時代は、ナポレンが失脚し、かつての王朝がヨーロッパ各地で復興するのである。オーストリアの主導でウィーン体制がとられ、フランス革命前の王朝時代の状態をよしとする復古調の方向へと流れ始める。

こんななかで、新しい動きを求めようとする反政府運動が、ドイツやイタリアで起こる。主人公のイタリアの青年大佐アンジェロ（オリヴィエ・マルティネス）は、当時民族統一を唱えて反政府運動を起こした秘密結社のカルボナリ党員である。しかも彼は、イタリアの名門出身の母が、ナポレオン遠征にともな

ってきたフランス軍人との間に生んだ私生児という生い立ちがある。

当時、フランスでは、王と貴族への優遇が大きくなり、これに反発する自由主義者が現れ、民衆が結集して一八三〇年に七月革命が起こる。そして、産業革命が進行する。

新しい時代の波が打ち寄せ、旧体制の人々と革新派の人々がせめぎ合い、その度に革命が起こり、そこから徐々に産業や、自由を求める動きが活発になるのである。

また、一八三二年はパリでコレラが流行り、各地で死者が続出していた。七月革命の後ということもあって、きわめて政情が不安定ななかでのコレラの発生は、政府が仕掛けていたといったデマが民衆のなかに広がっていた。一方、当時の警察総監の警告として、反政府主義者が、コレラは政府問題から民衆の目をそらすための、政府が仕掛けた毒殺作戦であるということをお聴きしている、といった布告も出たほどなのである。こういった動きも、民衆をますます混乱におちいらせていた。

『プロヴァンスの恋』の物語は、アンジェロが仲間の裏切りにあい、オーストリア政府の機関の手先に追われて、プロヴァンスを逃げ回ることから始まる。そこからさらに逃れ、コ



レラの流行るマノスクの町で暴徒に襲われ、かろうじて逃れたアンジェロは、屋根伝いにある家に紛れ込んだときに、侯爵夫人ポーリーヌ（ジュリエット・ビノシュ）と偶然出会う。彼女はなにも言わず、彼にパンとお茶と一夜の寝床を提供し、そして居なくなった。だがふたりは、今度は旅の途中で出会うことになる。アンジェロは革命の仲間に資金を届けるために身を隠しながらの旅を、ポーリーヌは離れ離れになった夫の侯爵を探すために旅をしていたのだ。

こうして、まったくかけ離れた境遇の男と女が出会う。政情不安のなかでの旅は危険きわまりない。アンジェロはポーリーヌの一夜の恩義を返すために、彼女を目的地まで守ることを伝え、彼女とともに危険な旅をするようになる。

ポーリーヌは、アンジェロの申し出を、すんなりとは受け入れない。しかし、それでもアンジェロは、彼女との旅をやめることはしない。旅の途中では、フランスの騎兵隊が要所要所において、革命分子を見張るために検問をしている。また、コレラが蔓延している、あちこちの町が死に瀕している。そんな中をふたりは旅をする。常に死と隣あわせにある。そ

してポーリーヌは、アンジェロが誇り高い紳士であることを知り次第に心を開いていく。やがて、テウスという町で、空き家になった豪邸に入る。そこでふたりは一夜を明かすことになる。そして初めてポーリーヌはアンジェロに自分の生い立ちを話すのだ。

実は彼女は町医者の娘でテウス侯爵を看病したことから求婚され、四十歳も違う結婚をした。しかし身分の違いから、すいぶんと陰口を叩かれてきたというのである。その日、彼女は疲れから倒れ、アンジェロは必死の看病をほどこす。その後、元氣になったポーリーヌをアンジェロは、無事に目的地へ送ることになる。

気品にあふれるふたりは、常に危険をともしにする旅のなかでも、決して自分を見失わない一途さと気高さをお互いに見つけて尊重しあい、知らず知らずに引かれあつていく。だが、それはあくまでもプラトニックだ。

プロヴァンスの起伏に飛んだ豊かな自然が、まるで主人公たちの強靱な魂と一体になるかのような強いうねりをみせてくれるのだ。それは、新しい時代のはざままで、未来へ向かって生きるという生そのものの喜びの賛歌に映るのである。

### 『プロヴァンスの恋』

(フランス)LE HUSSARD SUR LE TOIT

監督=ジャン・ホール・ラブノー

出演=ジュリエット・ビノシュ/オリヴィエ・マルティネス/ヒエール・アルティティ/ジェラルド

ドバールデュ

エースピクチャーズ配給

ル・シネマにて今秋公開